

出羽三山巡礼を支えた刎橋

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Esuchi

最 上川支流の寒河江川畔にある山菜料理の有名な旅館へ行ってみることにした。山形県西村山郡西川町の出羽屋という。ここは寒河江ダムと、寒河江川に架かる臥龍橋のほぼ中間にあたるので取材にもよい。

そんな皮算用で電車の窓を眺めていると、だんだん雲行きが怪しくなり、寒河江駅に着いた頃には、けっこうな降りとなった。寒河江ダムの高さ一一二メートルに達する大噴水を見たかったが、ダム湖で雨が打たれるよりも、ゆっくり酒と山菜を味わったほうがよろしいと、今回は臥龍橋のみにしぼることにした。

臥龍橋は、左岸の白岩一八カ村からの年貢を渡すためと、月山、湯殿山、羽黒山の三山詣での巡礼者のために架けられた。寒河江川沿いの国道一一二号線が、六十里越街道と呼ばれた出羽三山巡礼道とほぼ重なる。架橋の初めは元和八（一六二二）年のことらしいが、洪水でたびたび流され、さらに河の流れも変わるので架橋位置を定めることが難しかった。そこで、たとえ岩盤開削の労と金を費やしても、河幅がせまく、刎橋を架けるには適当な現在の場所が選ばれた。

刎橋とは、有名な甲斐の猿橋のような橋のことで、流れの激しい川や、深い渓谷のように架橋位置が河

床から高く、橋脚を立てられない場所に適している。刎橋を架けるには、兩岸に刎木という木材を差込み、その上にさらに刎木をのせて川の中央へ向かって徐々に伸ばしていき、間隔が狭まったところで、上に桁を渡してやればよい。こうした構造から河幅が広いと適さないが、河に橋脚を立てる必要がないので、洪水に流されるリスクは少ない。こうして、文政十（一八二七）年に橋長四三・六メートル、全幅員四五・五メートルの臥龍橋がかけられた。ちなみに現在の臥龍橋は、昭和十二（一九三七）年に架けられた橋長五三・三メートルのコンクリートアーチで、一スパンで渡したため、スパン長は当時日本第三位であったという。

寒河江駅でタクシーを拾い、国道一一二号線を上流に向かって進むと、一五分くらいで臥龍橋の右岸についた。お目当ての碑は、タクシーを降りた目の前に二つ並んで建っており、小さいのが臥龍橋の竣工を記念して文政十年に建碑された白岩龍脊橋の碑。工事に尽力した代官所手代の相澤大助ほか六名によるもので、いびつな自然石に文字が彫り付けられている。もとは架橋の際に切り通した左岸の岩盤にはめ込まれていたが、崩落の危険があり現在地に移された。当時、相澤たちは、臥龍橋のことを龍の背骨に見立てて龍脊橋と呼んだらしい。たしかに左岸橋

詰は岩盤を切り通しているので、刎橋が架かっている。岩の裂け目にもぐろうとする龍の背中のように見えただろう。

一方、大きいのが、翌十一年に地元の医師・高橋如蘭の撰文によって建てられた臥龍橋之碑であり、前年の舌足らずの碑を補うかのように、饒舌な碑文が刻まれている。臥龍橋の名はこの碑に初めて登場するが、龍脊橋よりも相応しいと受け入れられて今に至る。



左・臥龍橋之碑 右・白岩龍脊橋の碑

[交通] JR寒河江駅からタクシーで約15分

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。